
傭兵

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵

【Nコード】

N8411F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ルネサンス期のイタリア。傭兵達のビジネスの真相とは。実際に傭兵の間ではこんなこともあったそうです。

第一章

傭兵

イタリアの自由都市フィレンツェ。そのわりかし品のいい酒屋の個室で二人の男がテーブルに座り向かい合ってあれこれと話をしていた。人払いをしてそこで完全に二人になっている。

「じゃあこれでいいな」

「そうだな」

茶色の髪の子が黒い髪の子の言葉に頷いていた。見れば二人共身体つきはかなり引き締まり見るからに頑健であり顔もあちこちに向こう傷があり髭も厳しい。一見するととてもないゴロツキのようだが視線の鋭さは最早ゴロツキのそれを完全に超えていた。そんな連中だった。

「今回はこれで行くか」

「俺が皇帝側で」

「御前が教皇側だな。これでいいな」

「ああ」

茶色の髪の子が黒い髪の子の言葉に頷いた。

「じゃあこの俺はロレンツォ」マリーノは今回は教皇様の僕だ」

「それでこの俺ジュリアーノ」シエピはだ」

今度は黒い髪の子が笑って述べる。

「神聖ローマ帝国皇帝陛下の忠実な家臣だ」

「あくまで今回は、だな」

「そう、今回はだ」

ジュリアーノはロレンツォの言葉におかしそうに笑いながら答える。

「次はわからないぜ」

「そういえば俺が教皇様につくのは久しぶりか？」

ロレンツォもまた笑って言いだした。

「最近ずっと皇帝側だったからな」

「俺はフランス王についていたな」

ジュリアーノはジュリアーノでこう言う。

「最近な。まああの国の王様は欲が深いからな」

「全くだ。フランスは確かイングランドとかスペインとも仲が悪いんだろ？」

「ああ。それもかなりな」

ジュリアーノはロレンツォの言葉に答える。答えながら木のカッブになみなみと注がれている赤ワインをぐびりとやる。ロレンツォもまた同じものを飲んでいる。

「それでイタリアにもちよっかいを出してるってわけさ」

「よくやるよ」

ロレンツォはそれを聞いて呆れたように笑った。

「ついでに皇帝とも仲悪いのにな。フランドルで揉めてるんだらう？」

「フランスは何処とでも揉めてるぜ」

ジュリアーノは意地悪い笑みでフランスについて語った。

「それこそ周りの国全部とな」

「金を戦争にばかり使っているのか」

「だから田舎者なんだよ」

当時のフランスの評価はこんなものだった。欧州の中、とりわけ先進地域であったイタリアから見ればフランスは全くの田舎だった。料理も全く洗練されておらず芸術も文化も花開いているとは到底言えないような状況であった。フランスにもそうした時代があったのだ。

「あの連中はな。戦争と女のことしか考えられないのさ」

「まあ俺達も女についてはな」

ロレンツォはここで笑って述べた。話しながらチーズを口に放り込む。二又のフォークでだ。

「人のことは言えないか」

「それでもフランス人よりましさ。連中は手当たり次第だ」

フランス人はこうも思われていたのだ。余談だがナポリである病
気にかかりそれを瞬く間に欧州中どころか世界にまで広めさせてし
まった実績もある。

「俺達はちゃんと選ぶぜ」

「酒も食い物もな」

「そういうとき。で、フランス王はどうだったんだ？」

「金払いはよかったな」

それは保障するのだった。

「もつともそのせいであの国はまた金がなくなつたがな」

「いいんじゃないのか？その分俺達の懐に入ったからな」

「それもそうか。じゃあ今度は」

「教皇様と皇帝陛下だな」

「そういうことだな。それにしてもだよ」

ジュリアーノは飲みながら皮肉な笑みを見せた。そのうえでロレ
ンツォに語る。

「どっちもよくやるよ。毎回毎回」

「教皇様つてあれなんだろう？」

ロレンツォもそれに応えてシニカルに笑ってみせて述べる。

「神の代理人だったよな」

「一応はそうなってるな」

「一応は、か」

「じゃああの人は何に見えるんだよ、お宅は」

「そういう貴殿はどうだい？」

ロレンツォはそっくりそのままの言葉でジュリアーノに返す。

「何に見えるんだ、あの人はよ」

「どう見たって聖職者じゃないだろ」

これはジュリアーノだけでなくイタリアの殆どの人間が思ってい
ることだった。当時のローマ教皇といえば神の代理人というよりは
それこそ政治家だったのだ。

「あれだけ強欲な聖職者がいるかね。わし等よりも欲の皮が突っ張っててな」

「わし等よりもか」

「酒に女に御馳走に宮殿」

権力者で腐敗した部類の者が必ず求めるものである。

「権力や財産だけに飽き足らず。よくやるよ」

「しかもそれで満足しないしな」

ロレンツォも言い加える。

「あまつさえこのイタリアとドイツが欲しくて」

「ああ」

「皇帝陛下と戦争だ。皇帝が月で教皇が太陽だったな」

「そつえば今だに言ってるな」

ジュリアーノはふとこの言葉を思い出した。

「何百年も昔の言葉をな」

「世俗のことには関わらない筈だがな、バチカン」

「そんなのは忘れたんだろう」

「忘れたのか」

「都合のいいことだけ覚えていてそれ以外は忘れる」

ジュリアーノは少し真顔で述べてみせた。

「そついうものだろ？司祭様にしろな」

「貴族よりタチが悪いな」

この時代では常識のことだ。日本では延暦寺がその腐敗を織田信長に憎まれたがバチカンの腐敗はその延暦寺の僧侶達が聞いたならそれこそ腰を抜かして念仏を唱える程であった。バチカンの腐敗はそこまで酷くそこには多くの犠牲さえあったのだ。バチカンの為の犠牲が。

「まあ、今回も稼がせてもらうか」

ロレンツォはこれでとりあえずいいのだった。それはジュリアーノも同じだ。

「お互いな」

「ああ。じゃあ仕事はいつも通りだな」

「そう、いつも通りだよ」

また笑ってジュリアーノに告げる。

「楽しくやろうぜ」

「よし。じゃあ終わったら」

「マツケローニでも食うか」

今ロレンツォが話に出したのは所謂 Pasta だ。この時代、実はマルコポーロより前からこの Pasta は存在していた。ただしかなり高価で財産にもなった。

第二章

「教皇様の報酬でな」

「いやいや、皇帝陛下だろ」

ジュリアーノは自分の雇い主を話に出した。

「この場合は」

「それは貴殿だろう？わしは教皇様だ」

「まあどっちでもいいことだ」

ジュリアーノは実にドライにこう言うのだった。

「お金を貰えればな」

「ではたつぷりと報酬を受け取って」

「また宴会だな」

「ああ、マツケローニでな」

笑顔で言い合ってその場は乾杯にする。半月後北イタリアのとある場所でそれぞれの兵士達が対峙していた。一方の指揮官は彫が深い顔をしていて金髪碧眼だ。肌は白く背もかなり高い。もう一方は黒い髪と瞳でやや小柄な何処となく陽気な雰囲気の人だった。

まずはその金髪の男が叫ぶ。

「今この神聖ローマ帝国の完全復活を！敵を倒せ！」

「敵は」

「悪を為す者共だ！」

こう叫んで敵を己が持っている剣で指し示すのだった。

「悪を倒せ！いいな！」

「おお」

だがそれに対する兵士達の声は弱い。その中にはジュリアーノもいた。

「いいか、打ち合わせ通りだ」

演説をしている彼を無視して自分の兵士達に対してひそひそと話をしている。どうも事前に色々と彼等に話をしていたからしく打ち

合わせは細部にこだわらないものであった。

「そのままだ。いいな」

「そのままですか」

「そう、予定通りだ」

こつも彼等に告げる。

「予定通りだ。いつも通りとどちらがいい？」

「予定通りを」

兵士の一人が彼に答える。

「それで御願います」

「それはまたどうしてだ？」

「だっていつもと同じですよね」

「いつもと同じというと？」

すぐに答えることはなくまずは惚けてみせるジュリアーノであった。

「それは何だ」

「だって旦那様はいつも同じことを仰るじゃないですか」

彼はこうジュリアーノに述べた。

「だじからですよ」

「そうか」

「程々にですよね」

その主に対して確かめた言葉であった。

「戦場においては」

「その通りだ。命を失つては元も子もないぞ」

見れば彼は立派な鎧を着ている。しかし兵士達は実に粗末なものだ。まずはその差が目に着く。そしてその兵士達の殆どはどう見てもドイツ人ではなかった。イタリア人であった。

「わし等は傭兵だぞ」

「ええ」

「傭兵とは何だ」

部下の兵士達に次に尋ねたのはこのことだった。

「傭兵とは。何なのだ」

「戦場に出てお金を稼ぐ仕事です」

「そう、それだけだ」

部下の一人の返答に満足そうに答える。

「わかつたら無理をするな」

次の言葉はこれであつた。

「いいな、決してな」

「わかりました」

彼等がこうしたやり取りをしているその頃。教皇軍では従軍している司祭が将兵達に厳かな様子で話をしていた。その緋色の法衣から彼が枢機卿であることがわかる。一国の君主にも相当する地位と名誉、それに富がある。言うならば教会の君主達である。その彼が軍に話をしているのだ。

「宜しいですか。あれは神に逆らう異端の軍ですぞ」
こう告げている。

「ですから容赦は無用。いいですな」

「まずくなつたらいつも通り逃げるのだ」

その話をしているすぐ側でロレンツォがこう部下の兵士達に話をしていた。平野の向こう側にいる皇帝軍には目もくれず自分の兵士達と話をしているのだ。

「ばれないようにな」

「ばれないようにですか」

「安全な場所にまで一時退避だ」

「こうも言い替えてもみせる。」

「その時にはな」

「やはりばれないようにですね」

「では聞こう」

急に真顔になつての言葉だ。

「イタリア男が命をかける時は何時だ」

「そんなの決まっていますよ」

「言つまでもありませんよ」
兵士達は胸を張って口々にその言葉に答えるのだった。

第三章

「惚れた女の為ですよ」

「戦争じゃ死にませんよ。こんなので死んでも何にもなりませんよ」
「なあ」

「そういうことだ」

ロレンツォが言いたいこともその通りなのだった。

「わかるな。俺達はどこで死ぬことはない」

「ただの金稼ぎですね」

「そういうことだ。わかつたらな」

「ええ。適当に」

「適当にやっつてればいいですね」

「そういうことだ。それではだ」

ロレンツォはここでようやく真つ当に相手を見た。それでも姿勢はリラックスさせたものだった。武器の剣すら腰から抜いてはいない。

「そろそろ行くか」

「わかりました」

「適当に」

「全軍進撃だ！」

指揮官からの言葉が響く。

「教皇に逆らう愚か者達に天罰を！」

「どうせ今度の戦いも大したことはない」

ロレンツォはその真剣な言葉の側で平気な顔で述べる。

「力を抜いてな。イタリア人は相手にするな」

「相手にしないんですね」

「同じ街の奴等もいるぞ」

そのことも言うロレンツォであった。

「まさか同じ街の奴等でやり合うわけにもいかないだろう」

「まあ確かに」

「それだけはいけませんね」

「スイスの奴等はドイツの奴等とやり合うしな」

見ればスイスのパイク兵、長槍の者達は教皇側にいる。彼等は趣味の悪い縦縞のタイツに羽根がついた帽子のやたら大きな剣を持っている連中を睨んでいた。その剣の連中もスイス兵達を睨んでいる。彼等はドイツの傭兵ランツクネヒトだ。強さよりもその野蛮さで有名だ。

「あの連中を街に入れさえしなければいい」

「そういうことですな」

「まあ奴等はスイスの連中に任せて」

「俺達は適当にですね」

「そうだ、では行くぞ」

「はい」

こうして彼等はロレンツォの指示に従いのろろと進撃をはじめた。向こうのジュリアーノの部隊も同じで実に緩慢に動いていた。そして接触しても剣を交えるのは実にいい加減なものであった。

「やあ」

「たあ」

気の抜けた声で掛け声を出して剣を出し合う。しかし斬るつもりはない。

「死ね」

「殺すぞ」

やる気のない戦場での声だ。しかも鉄砲も変な方向に撃つ。傍から見ても真面目なものとはとても思えないものであった。しかし彼等はそれを続けていく。

戦いはイタリア人の受け持ちではだらだらと続いていた。やがて食事時になると指示が出るより先にお互い撤退していた。その時の速さはかなりのものだった。

「さあ飯だ飯だ」

「ワインだワイン」

「果物もあるぞ」

パンやイチヂク、肉にワインを早速食べだす。まだスイス兵とドイツ兵は必死に戦っているがそんなことには構わない。イタリア人達はもう適当にやりはじめている。

「いいか、諸君！」

しかもその中には指揮官もいた。

「今戦局は我等に有利だ。このまま押すぞ！」

「そうらしいですよ」

兵士の一人がロレンツォに声をかけてきた。

「どうやら」

「ああ、そうなのか」

完全に他人事のロレンツォだった。彼は肉やらパンやらを美味そうに食いながらワインを楽しんでいる。これでもかという程ワインをがぶ飲みしている。

「じゃあ食うぞ」

「ええ」

「飯も報酬のうちだぞ」

彼は兵士達に告げる。

「だからだ。皆ほとんど食えよ」

「はい、わかってますよ」

「報酬はきつちりともらいますよ」

「その為に来てるんですからね」

彼等はそのまま酒と食べ物を楽しみ昼寝に入った。見ればジュリアーノもそうだった。彼はワインで真っ赤になった顔でそのまま休息に入った。

「隊長、何かまた進撃しろって言っていますよ」

「そりゃドイツ人だけだろ？」

部下の兵士の言葉にこう返すだけだった。

「わし等じゃない。気にするな」

「そうですね。じゃあ」

「シエスタだ」

「はい」

彼等もまた昼寝に入る。呆れたことに皇帝軍のイタリア人指揮官もそれに入る。しかし誰も相手にしない。それでやっと昼寝から起きればのろのろと動き出した。また適当に戦いだす。何しろ酒が入っている。で午前よりもさらに動きは悪い。しかも夕方になったらまた指示より先に戦場から帰るのであった。

「じゃあ帰るか」

「ええ。仕事は今日で終わりですね」

「何か明日もあるらしいですよ」

「金は？」

ジュリアーノは部下に最初に尋ねるのだった。

「金は払ってくれるのか？」

「後払いらしいですよ」

「じゃあこのまま帰るぞ」

それを聞いてぷい、と顔を背けるジュリアーノだった。

「後払い程あてにならないものはないからな」

「ええ、確かに」

「向こうもできるだけ金はケチりたいんだよ」

「せこいですね、皇帝の癖に」

「ドイツ人は所詮そんなものだ」

自分達のこととは完全に棚にあげての言葉だ。

第四章

「まあ前払いならいいと言っておく」

「そういうことですね。じゃあ」

「撤収だ。いいな」

「了解です」

彼等はそのまま帰ってしまった。ロレンツォの部隊も同じだ。気付けばその日までの契約のイタリア人傭兵は皆帰ってしまった。それを見て皇帝軍も教皇軍も戦場を離脱するのだった。戦いはとりあえず引き分けという形で終わり後は外交交渉だった。むしろそちらの方が激しい応酬が行われ教皇側が流石と言うべき外交手段を駆使して皇帝を丸め込み多くの利益を得たのであった。しかもこの時にはジュリアーノとロレンツォはこぞって教皇の下におりそれでもかなりの収入を得たのであった。

「いや、これでいい」

「うむ、万事な」

ジュリアーノとロレンツォは今度はローマで楽しく飲んでいた。今回は教皇についていたので必然的にここになったのだ。そうしてそのローマの酒場で楽しくパスタを食べていた。

細長く平べったいパスタだ。そこに野菜やキノコがオリーブの油と共にパスタに混ぜられている。二人はそれを赤ワインと共に楽しんでいたのであった。

「おかげでマツケローニが食べられるようになった」

「そつえばだ」

ここでジュリアーノは二又のフォークをパスタに絡めさせつつロレンツォに尋ねてきた。

「今回の戦闘で何かあったか？」

「いや、別に」

ロレンツォは首を横に振ってジュリアーノに答えた。

「何もないな、特に」

「そうだな。こっちもだ」

ジュリアーノも答えながらパスタを口に入れる。大蒜がその中にありその辛味を楽しみつつ赤ワインを飲む。パスタに絶妙なまでに合っていた。

「いつも通りだ」

「皇帝陛下は今回かなりけちだったそうだな」

「ああ」

無然とした顔でロレンツォに答えた。

「金がないそうだ」

「何だ、またか」

ロレンツォはそれを聞いて呆れたような声を出した。

「また金がないのか、あの皇帝陛下は」

「今ドイツは大変らしい」

「いつも大変だな、あそこは」

「それで今もだ」

このことをロレンツォに語るのだった。

「今中でかなりゴタゴタしていてな。何とかこっちに兵は出せたが」

「それで終わりってわけか」

「それでだ」

ジュリアーノはさらに話を進めていく。ロレンツォは聞く役に回っている。

「戦争をさつさと終わらせて外交に入ったが」

「どうせバチカンに足元見られたんだろ」

「そもそもバチカンがそのゴタゴタの原因さ」

ジュリアーノはシニカルに笑ってこう述べた。

「そのバチカンがな」

「何だ？司教様が皇帝陛下に文句でも垂れてるのか」

「それだよ」

ジュリアーノは人差し指を立てて指摘するように動かして語った。

「それなんだよ、実は」

「あそこじゃ司祭様が随分お偉いそうだな」

「こつちと同じさ」

ジュリアーノは口の左端を歪めさせていた。

「そのところはな」

「一緒か」

「司祭様がお供えを独占しようとして皇帝陛下がそれに文句を言われた」

「それでそれが許せなくて一戦」

「しかしお金がない」

ジュリアーノはパスタを飲み込みついでにワインもまた飲んでから面白おかしく語ってみせる。当時の神聖ローマ帝国は領邦国家であつたうえに教会の力が強く皇帝の力はさして強いとは言えなかつたのだ。ドイツが中央集権的国家になつた時期はナチスが政權を握つた第三帝国の時だけだ。全体主義国家とはすべからず中央集権国家だからドイツのそうした地域性を消すことができたのだ。

「結局はそれで」

「中と外から教会にしてやられたつてわけか」

「そういうことさ。教会は強かつた」

ジュリアーノはまた楽しそうに言う。

「そしてわし等に気前よくお金を下さつた」

「おいおい、お金ではないぞ」

ロレンツォも笑つてジュリアーノに言う。

「これはお恵みだ」

「お恵みか」

「そう、神が下されたお恵みだ」

心にもないことを平気な顔で言っていた。ロレンツォだけでなくジュリアーノも顔だけは神妙にはしてみせている。あくまで顔だけであるが。

「神の代理人がその使徒の働きに下されたものだからな」

「そうそう、そうだったな」

「そうだ。この Pasta も」

まだ Pasta はある。その量の多さもまた楽しんでいるのだ。

第五章

「そうではないか」

「そうだったな。いかんいかん」

「それでだ。今度はどうする？」

「今度は」

「次は何処で戦争だったかな」

ロレンツォは視線を上にとって少し探る目になっていた。

「この戦いは終わったしな」

「何でもナポリらしいな」

「ナポリか」

「そこにスペイン軍が来ているらしいぞ」

こうロレンツォに話すのだった。

「海からな」

「海か。トルコもいるのにか」

当時オスマン＝トルコはアジア、アフリカ、ヨーロッパを席卷し地中海も我がものとしようとしていた。まさに飛ぶ鳥を落とす勢いの超大国だった。イスラム教国家である彼等は欧州世界にとっては恐るべき脅威であったのだ。

「それでも来るのか」

「それでもイタリアが欲しいらしいな」

「欲深い話だ」

「それでだ」

ジュリアーノはさらに言う。

「何かフランスも金がないのに来るようだしな」

「あの連中もか」

「それで教皇様はまずスペインと話をされ」

「うむ」

ビジネスの話に本格的になってきた。ロレンツォは相変わらずパ

スタを食べながらであるが真剣な顔になってジュリアーノの話を聞いている。

「それでフランスに対するか」

「ついでに神聖ローマのその皇帝陛下に牽制も要請されるそうだな」

「今さっきまで戦った相手にもな」

「権益を少し譲ってな」

笑いつつ声を小さくしてみせるジュリアーノだった。

「それでらしい」

「やれやれ。やっと守った権益をか」

「政治とはそういうものだ。それでだ」

あらためてロレンツォに顔を向けて声をかけてきた。

「今度はどちらにつく？」

「それか」

「まずフランスは金がない」

第一に問題となるのはこのことだった。

「支払いが悪いぞ」

「そうだな。それに兵も集まりそうにないな」

「スペインは多分教皇様と折り合いをつける」

外交によってだ。

「しかも神聖ローマはフランスの宿敵。フランスは孤立無援だ」

「今フランスにいたら死ぬようなものだな」

「負けるのは確実だな」

ジュリアーノははっきりと言い切った。

「それはな」

「では止めだ」

ロレンツォも決断を下した。

「フランスにはつかない」

「ではバチカンだな」

「わしはそうする」

腕を組んでジュリアーノにはっきりと答えた。

「そっちはどうする？」

「わしも今回は最初からだ」

ジュリアーノもそれは同じだった。

「今のフランスにつくなんてな。愚の骨頂だぞ」

「そうだな。では今から教皇様の下へ馳せ参じるか」

「ついでにだ」

ジュリアーノはさらに言う。

「仕事仲間にも声をかけておくか」

「他の連中にもか」

「ああ。いつも通りな」

楽しそうに笑ってロレンツォに述べる。

「ただ。今回は根回しではなく」

「そちらではないか」

実はいつも仕事前にはこうした話を同業者の間でしているのだ。互いに戦場で敵味方になった時になあなあで終わらせる為だ。丁度先のジュリアーノとロレンツォの様にだ。

「全員がこっちにつくようにだ」

「イタリア人の団結だな」

ロレンツォもまた楽しそうに述べる。

「侵略者フランスに対するな」

「そうだ、今度は大義ある戦いだ」

ジュリアーノもこううそぶく。

「だからだ。お金はたんまりもらっぞ」

「そうだな。そして命を守って」

「楽しくやるとするか」

「よし、ではそろそろ」

ロレンツォはここで二人の Pasta とワインを見る。もうどちらも残り少ない。

「行くとするか」

「うむ」

最後にこう言い合って席を立った。その時にジュリアーノは先の戦いで教皇軍において敵を討てと言っていた枢機卿に出会った。彼は悪びれずに一礼してこう言ったのだ。

「暫く厄介になりますんで」

「頼みますよ」

「ええ、お支払いは」

「神は忠実な者への慈悲は忘れません」

これが返答だった。全てはビジネスだった。戦いも何もかもがルネサンス期の話である。今となっては想像もつかない話であるがこの通りであった。

傭兵 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8411f/>

傭兵

2010年10月8日15時04分発行